

## VALERIE JOYCE / NEW YORK BLUE

ヴァレリー・ジョイス / ニューヨーク・ブルー

またひとり魅力的なシンガーが登場した。その名はヴァレリー・ジョイス。不思議な魅力を持った歌手だ。いわゆるエラ、サラ、カーメン、アニタのようなオーソドックスなジャズ歌手ではない。かといって、いまだきのポップ系ジャズ歌手というわけでもない。この人の歌を聴いていて、懐かしい友人に再会したような気分になった。最初、それがなにを意味するのかわからなかったが、途中でハタと気がついた。そしてヴァレリーって、ひょっとしたら21世紀のモーガナ・キングではないかと思ったりした。今日、こういうタイプの歌手って、けっこう珍しいのではないか。

といて、別にモーガナ・キングのそっくりさんとか、そういった意味ではない。モーガナ・キング自身が超個性的な存在なので、その系列の歌手なんてほとんど見当たらない。なのでヴァレリーの歌の中に、その要素を発見して単純に喜んだというわけだ。あと、カサンドラ・ウィルソンに通じる浮遊感と脱ジャンルの

なスタンス、亡きシャーリー・ホーンをほうふつとさせる語り口のうまさ＝ドラマ性＝ストーリーテラー的側面も魅力とっていいだろう。

プロフィールをざっと紹介しよう。ヴァレリー・ジョイスは父親がアメリカ人、母親が日本人という日本生まれの日系アメリカ人だ。横浜のインターナショナル・スクールで学んだあと、1991年にワシントン州タコマに移りピュージェット・サウンド大学に入学、音楽ビジネスを専攻した。8歳からクラシック・ピアノを習っていて、大学のビッグ・バンドではシンガー兼ピアニストとして活動した。大学2年の時にはボストンのパークリー音楽院のオーディションに応募、ジャズ・ヴォーカルの奨学生に合格したが、やりたいことがあったとかで、結局パークリーには行かなかったという。卒業後、94年にシアトルに移りプロとしての活動を開始した。といっても最初は昼間フルタイムで働き、夜はミュージシャンという二重生活を送った。その当時は歌手専門ではなく、むしろピアニストと

しての活動がメインだったようだ。

生年月日は不明だが、以上のような経歴から、現在30代前半だろうと想像する。本格的にジャズを勉強したのは大学時代だったが、そのころ彼女が聴いたレコードは、セロニアス・モンクの『ブリリアント・コーナーズ』、デクスター・ゴードンの『アワ・マン・イン・パリ』、マイルスの『カインド・オブ・ブルー』、それに映画『ラウンド・ミッドナイト』のサントラ盤などだったそうだ。

そして2002年にデビュー・アルバム『Reverie』(VJ Music)を発表した。マイケル・ウルフ(p)、バダル・ロイ(tabla)、アレックス・フォスター(sax)らが参加しているそのアルバムは11曲入り。「イースト・オブ・ザ・サン」「ニューヨークの秋」「4月のパリ」「いそしぎ」などのスタンダードのほか、自作曲も3曲歌っている。そのアルバムが評判になってチェスキー・レコードの目にとまり、本作を録音するに至ったというのだ。ここに入っている自作曲の「オアシス」と、「ムーン・アンド・サンド」はそのデビュー作でも歌っていた。

本作はスタンダード中心だが、ほかにトレイシー・チャップマン、ジミ・ヘンドリックス、ビー

トルズのナンバーも取り上げている。物憂げでクールなヴァレリーの歌声には独特の風情があり、一度聴いたら病みつきになりそうだ。

## ① イット・ネヴァー・エンタード・マイ・マインド

1940年代以降、多くの人によって歌われ演奏されてきたおなじみの曲。マラソン・セッションのマイルスを筆頭に、インストとヴォーカルどちらも名演・名唱が目白押しだが、そんななかにあってもヴァレリーの歌声はとても個人的。アン・バートンの可憐さとも違う女性らしさ。まるでモノローグのような感じで物憂げに歌っていて、この1曲でヴァレリー独自の世界に引き込まれる。

## ② ブルー・イン・グリーン

実はビル・エヴァンスが書いたともいわれているマイルス・デイヴィスの有名曲。初演はビルも参加したマイルスの『カインド・オブ・ブルー』だが、ビル自身も繰り返し録音しており、暗に自分の曲だと主張していた。それはともかく、元タインスト曲なので歌手が取り上げるのは珍しい。そういう意味では、新人のヴァレリーがこの曲を歌っているのには驚いた。たぶんカサンドラ・ウィルソンの影響だろう。カサ

ンドラは85年のJMT盤『ポイント・オブ・ヴュー』で自作詞をつけて歌っていたが、ここでのヴァレリーはそのカサンドラの歌詞を用いている。

### ③ ベイビー・キャン・アイ・ホールド・ユー

個性派のシンガー・ソングライター、トレイシー・チャップマンが1988年発表のデビュー作で歌っていた彼女の自作曲。プリミティヴな力強さにあふれていたチャップマンとは異なり、ヴァレリーはテンポをよりスローに設定、しつとりと歌っている。

### ④ フィーヴァー

この曲、いろんな人が歌っているけど、きわめつきはやはりベギー・リーだろう。58年のキャピトル録音を筆頭にベギーは何度も録音している。ベギーが歌うと鉄火肌ふうになるが、ヴァレリーは奥ゆかしい感じ。バラード中心の本作にあって、これは躍動感漂うナンバー。ローレンス・フェルドマンのサクソも効果的だ。

### ⑤ オアシス

本作に1曲だけ入っているヴァレリーのオリジナル曲。この曲は前述のファースト・アルバムでも歌っていた。癒し系の曲とっていいだろう。

### ⑥ エヴリ・タイム・ウィ・セイ・グッドバイ

1940年代にコール・ポーターがミュージカルのために書いた曲。“愛し合ってるのにケンカ別れして、どうしようもなく寂しくなる”気持ちを、“メジャーからマイナーにかわる”と表現している歌詞が秀逸。この場合のメジャー／マイナーはもちろん野球のことではなく、長調／短調のこと。こういう曲はヴァレリーの個性にぴったりなので、実にサマになっている。

### ⑦ ムーン・アンド・サンド

アレック・ワイルダー作の渋いナンバー。ベティ・ブレイクがベツレヘム盤で歌っていたのを思い出す。ただしヴァレリーはこの曲、キース・ジャレットの演奏を聴いて気に入ったのだという(『スタンダーズ Vol.2』)。元々美しい曲だが、ヴァレリーが囁くように歌うと、曲のよさがさらに光り輝く。

### ⑧ リトル・ウイング

伝説のギタリスト、ジミ・ヘンドリックスが67年に発表したセカンド・アルバム『ボールド・アズ・ラブ』に収録されていたナンバー。原曲はワイルドであると同時に叙情的なブルース・ロックだったが、ヴァレリーはあくまでも自身のスタイルでしなやかに歌っていて、これにはちょっとびっくりだ。

### ⑨ ウィーヴァー・オブ・ドリームス

いかにもヴィクター・ヤングの作曲らしい美しい曲。ピング・クロスビーやトニー・ベネットなどヴォーカル・ヴァージョンは数多いが、メロディの美しさにひかれてか、インストゥルメンタルでもよく演奏される。こういう渋い曲をしっかりと自分のものになっているあたり、ヴァレリーは新人離れしている。

### ⑩ イッツ・イージー・トゥー・リメンバー

1935年のミュージカル『ミシシッピ』のためにリチャード・ロジャース～ロレンツ・ハート・コンビが書いた有名スタンダード。ジョン・コルトレーンは人気作『バラード』で演奏していた。キース・ジャレット・ファンのヴァレリーは、キースの『アット・ザ・ディア・ヘッド・イン』にインスパイアされて歌う気になったのかもしれない。歌詞は“別れたあと、相手を思い出すのはやさしいけど、忘れるのは辛い”といった意味。

### ⑪ ダーン・ザット・ドリーム

1939年のミュージカルのために書かれた曲なので、最初かられっきとした歌曲なのに、なぜかマイルスやデクスター・ゴードン、ソニー・リンスなどの演奏物をつい思い出してしまふ。

7曲目の「ムーン・アンド・サンド」や9曲目の「ウィーヴァー・オブ・ドリームス」もそういった傾向があり、この種のナンバーを好んで歌うところにヴァレリーの資質・特質が伺える。

### ⑫ アイ・フォール・イン・ラヴ・トゥー・イージーリー

1944年の映画『猫を上げて』でフランク・シナトラが歌って以降、多くの人に取り上げている超有名曲。ヴァレリーの好きなマイルス(『セヴン・ステップス・トゥー・ヘヴン』)やキース・ジャレット(『スタンダーズ Vol.2』)も、もちろん録音している。ヴァレリーは切ない曲を知的かつクールに表現している。

### ⑬ ゴールデン・スランパーズ

ビートルズ・ナンバーはジャズ歌手も頻繁に歌っているが、この曲はそれほど多くカバーされていない。サラ・ヴォーンやヘレン・メリルがビートルズ曲集で歌っていたが、個人的にはモーガナ・キング(79年のミューズ盤『ハイヤー・グラウンド』)をイメージしてしまった。ヴァレリーってやっぱり私にとっては21世紀のモーガナ・キングなのである。

Dec, 2005 【市川 正二】Shoji Ichikawa